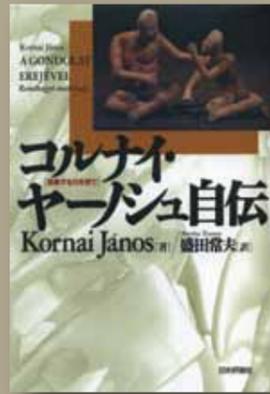


ドナウ の 四季

2012年・新春号・No.13

冬の発電所	小松 裕文	1
コバケンの追悼コンサート	盛田 常夫	2
小林研一郎を追って	坂梨 正典	4
小林研一郎コンサートを聴いて	酒見 順子	5
灯火とともにーヴェルディ「レクイエム」	坂井 圭子	5
小林コンサートへ	菊地 茜	5
もみの木の話	森田 友子	6
ジュールに住んで	佐々木 義明	7
オートバイのある暮らし	工藤 亮一	8
学ぶことは楽しいことだ!	藤田 未来	9
留学生自己紹介	山田 真理子・上杉 典子	10
緑の丘日本語補習校	中野 明日香	11
水球 オリンピックに向けて	長沼 敦	12
水球への挑戦	曲山 紫乃	13
面白くなってきたテニス界	盛田 常夫	14
4ヶ国対抗親善ゴルフ大会	平松 達久	15
スポーツ行事・運動サークル情報		16



コルナイが綴る 20 世紀中欧の歴史証言

池田信夫「21世紀最初の10年ベスト経済書」第2位にランク
「週刊ダイヤモンド」2006年ベスト経済書第9位にランクイン

コルナイ・ヤーノシュ自伝

— 思索する力を得てコルナイ・ヤーノシュ【著】 盛田常夫【訳】

◆好評発売中！ ◆定価 4935 円（税込） ◆A 5 判 / ISBN 4-535-55473-0 日本評論社



体制転換の経済学

黄色の教科書シリーズで知られる専門学部の定番テキスト。体制転換の理論と転換直後の現状を分析。各大学で教科書として使用。

盛田常夫著

第一部 社会主義経済の失敗

社会主義崩壊をもたらした社会的退化への論理を構築。交換経済と再分配経済の比較分析に新たな視点を提供。

第二部 ポスト社会主義経済

体制転換の過渡期の問題をすべて取り上げ、解決の道筋を示す。地域による体制転換の違いを解明。

■ 新世社 新経済学ライブラリー20 定価2781円(税込)



なぜハンガリーは独創的な科学者を輩出したのか

20 世紀を創ったハンガリー人 マルクス・ジョルジュ【著】 盛田常夫【編訳】

■ 定価 3045 円（税込） A 5 判

■ ISBN 4-535-78331-4

異星人伝説

「週刊文春」(米原万里)、「週刊ダイヤモンド」(北村伸行一橋大学教授)で書評。
ハンガリーは 20 世紀の科学の発展に貢献した多くの頭脳を輩出した。大きな足跡を残した科学者たちの評伝。

体制転換20年の歴史的・理論的総括の書

ポスト社会主義の政治経済学

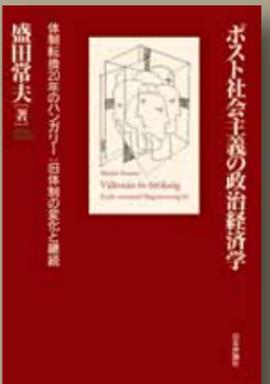
体制転換20年のハンガリー：旧体制の変化と継続

新しい概念を駆使して、体制転換以後の中欧社会の状況を分析。

日本経済新聞(2010年3月21日)ほか、多数の書評。

旧来の定説を覆し、新たな知見を広める革新の書。

盛田 常夫著 日本評論社 定価3800円



冬の発電所

小松 裕文

1枚の絵葉書がある。岡鹿之助の「雪の発電所」である。長野県山ノ内町・志賀高原の麓、十二沢にある水力発電所を描いたもので、筆者が大好きな絵画の一枚である。西洋を感じさせる発電所の建物が信州の自然とうまく調和し、信州の暗く長い冬を感じさせる。

平成を迎えた1989年に朝日新聞社によって企画された「昭和の洋画百選展」でナンバーワンに選ばれば、1981年には「近代美術シリーズ第九集」の切手にもデザインされた。作品が発表された1956年の第2回現代日本美術展では最優秀賞を受賞し、翌年には毎日美術賞の対象にもなった名画である。

かねてからこの作品の舞台になった平穏(ヒラオ)第一発電所を再度訪ねてみたいと思っていた。

2011年5月、日本に一時帰国した時それが実現した。帰国した際、母校のあった須坂市の高等学校の同級生が筆者を囲んでお酒を飲む会を催してくれた。15人ほど集まってくれ、高等学校の思い出やハンガリー生活の話で盛り上がるなか、同級生の一人もこの絵のファンだということから一緒に発電所を訪ねようということになった。

友人の自宅のある須坂市から山ノ内町へは車で45分くらいの距離。現在の発電所は岡鹿之助の「雪の発電所」のイメージとは程遠いもの。山ノ内町湯田中から志賀高原に通じる自動車道路を5kmほどで発電所入り口にたどり着けるが、発電所の前には杉の木が生い茂り発電所の建屋、水圧鉄管を一望できる状態ではない。「雪の発電所」に描かれている6個の建屋の窓は現存する建屋の窓と同じ数であることを確かめ何となく満足できた。

この絵が描かれたのは1956年、昭和31年。筆者が高校1年生の時。当時、自動車道路は別のルートを通っており、自動車道路から発電所には歩道で繋がっており、「

雪の発電所」と同じような景観だった。開発の名の下、環境も大きく変わってしまった。せめて名画のモデルになった景観ぐらい残せなかったのだろうか。

この絵は筆者の中学校時代の学校行事を鮮明に思い出させてくれる。この発電所の右斜め後方に筆者が通っていた平穏中学校の学校林があって、中学校1、2年の春



(1952年~53年)は授業の一環として植林作業があった。教室で授業を受けているよりはるかに楽しい行事だった。作業当日は中学校に集合して約5kmの道のりを徒歩で現場に向かった。大仏さん(大悲殿・平和観音)の近くの中学校から安代橋を渡り、沓野の集落を通りぬけて、沓野神社、上林温泉分岐点を過ぎて約1kmでようやく発電所から志賀高原に通じる旧道へと辿りつく。

旧道は石だらけ歩き難い道、現在のように舗装が行き届いている時代からは遠い昔の話になった。旧道は「なめつつあか」と呼ばれ、杉林の中、途中に「すずめのお宿」という茶店があった。裏の小川の水は冷たく、長い、緩やかな上りの道を歩いてきた後は何よりのご馳走だった。50年も前、一般の家に車もない時代だから環境汚染もなく、天然に流れる小川の水が飲めたのだ。

学校林は十二沢から坊平に掛けての急斜面だった。スコップと鍬で穴を掘り、杉の苗木を植え込む作業だった。担任の先生が「皆さんの植える杉は30年後に伐採して新しい校舎の材料になります。心を込めて植えましょう」と挨拶をしたのが思い出される。この杉は校舎の立替えに使われたのだろうか。多分使われなかったことだろう。平

穏町が町村合併で山ノ内町になり、町に4つあった中学校は統合されて山ノ内中学校になり、校舎は湯田中駅の近くに鉄筋コンクリートで新築されたからだ。

お昼の休憩時にはあちこちに群生していた「かたくり」の根を掘った記憶がある。自然破壊になるから、現在では許されることではないが、この時代には問題なかった。焼いて食べるとデンプンの香りと舌触りが何とも言えなかった。

植林作業の後は上林に住む友人の家に寄った。父親が長野電鉄系のホテルの支配人で同系列の上林温泉ホテルの温泉プールで泳がせて貰った。当時中学校にはプールがなく水泳といえど近くの夜間瀬川、角間川の急流をせき止めた水浴び場しかなかった。25mの温泉プールは大変な魅力だった。水泳パンツを持っている友人はほとんどなく、手ぬぐいと紐で俄かつくりの水着をつけて泳いだ。

この絵の中央に描かれている水圧鉄管は水源の琵琶池まで通じている。志賀高原の丸池や琵琶池に釣りや遊びに行く時は鉄管に沿った急な道や、鉄管の上をよく歩いたものだ。現在は立ち入り禁止になっているようだが、これも楽しい思い出の一つ。家が貧しくバス代はもらえないので、遊ぶにはひたすら歩くしか方法がなかったのだ。

(こまつ・ひろふみ)

コバケンの追悼コンサート

東日本大震災からまだ1年も経っていない。被災者の方々の無念と厳しさを慰めようもなく、遠く離れた地からの支援にも絶対的な限界はあるが、二つの追悼コンサートでハンガリーの友人たちとミサを執り行った。わずかながらの義援金も集まった。5月のマーチャーシュ教会でモーツァルト「レクイエム」、11月は芸術宮殿(MUPA)でヴェルディ「レクイエム」と、二つの大きな鎮魂曲を奏でることができた。多くの心あるハンガリーの友人・知人や音楽家が、演奏者としてあるいは聴衆として参加してくれた。集められた義援金額は大きくないが、震災に心を痛めているハンガリーの人々と一緒に、鎮魂の夕べをもてたことが何物にも代えがたい。

この二つのコンサートの企画に協力してくれたハンガリーの音楽家は、皆、「炎の指揮者コバケン」こと、小林研一郎が40年近い年月にわたってハンガリーで育ててくれたコバケンファンである。とくに国立合唱団(国立フィルハーモニー合唱団)は5月のコンサートの音頭をとってくれ、11月には相思相愛のコバケンと共演してくれた(本誌11号には、5月のコンサートでオケ編成のために奔走した桑名一恵さんのエッセイが掲載されている)。

コバケンと国立合唱団との付き合いは長い。私が初めて合唱団のお手伝いをしたのは1996年の日本公演。滞在費が100万円ほど足りないと緊急連絡を受け、野村證券専務の斉藤惇氏(現、東京証券取引所社長)にお願いして即座の支援をいただいた。この前年、コバケン率いる武蔵野合唱団が国立フィルー国立合唱団とマーラー「千人の交響曲」を企画したが、屋内スポーツ会館を借りる資金が足りない和相談された。急いでこのコンサートを野村投資銀行ハンガリー(株)創立5周年記念行事に仕立て、本社から300万円を出してもらった。1994年秋に現在の国立フィル支配人のコヴァーチ・ゲーザがMAVオーケストラから移籍・着任したばかりで、このコンサ

トがゲーザと私の最初の大仕事になった。こういう経緯から、いつの間にか、コバケンと国立フィルや合唱団との間を仲立ちする役回りを演じてきた。

コバケンが一番持ち味を発揮できるのが、合唱曲付き交響曲である。ソリスト、合唱団、オーケストラを束ねるのはたいへん難しい。オーケストラ指揮に定評のある指揮者は多いが、歌も同時に指揮できる指揮者は意外に少ない。歌心がないと、ソリストや合唱団を指導できないからだ。

世界の指揮者の多くは楽器のソリストとして大成した人たちだ。これらの指揮者の音楽観や音感とは並みものではない。現在のハンガリー国立フィルの音楽監督であるコチシュ・ゾルターンは、言うまでもなくピアニストとして一流の音楽家である。したがって、こういうソリストが音楽監督になると、日ごろの練習は非常に厳しくなる。間違った音をだす者はすぐに名指しされる。こういう訓練を重ねれば、確かにオーケストラの技量が上がる。そして、これはオーケストラにとって貴重な価値である。他方、コチシュのコンサート本番の指揮振りは、褒められたものではない。コチシュにしてみれば、日ごろの練習やリハーサルで厳しく注意したことが守られていれば、それで問題ないのだろう。しかし、彼の指揮振りを見る限り、その「完成品」の価値を理解するのが難しい。それは合唱曲を振る場合も同じである。ピアノは超一流でも、歌がうまいとは限らない。歌心をもつのはもっと難しい。それが指揮振りにも現れる。

コバケンはよく「ソリストとして高みに達した人々を、僕のような才能のない音楽家が指揮(指示)するのは申し訳ない」という意味のことを話す。一つ一つの楽器や声楽の道で大成した音楽家には、それぞれ孤高の凄みがある。その高みは持って生まれた才能にも支えられている。とくにヨーロッパの音楽家は世界のトップ水準にある。そういうクラシック音楽の世界で、しかも中欧

盛田 常夫

という音楽のメッカで、音楽家としての認知を受けるのは並大抵のことではない。しかも、世界の外れからきた日本人がこの地で名声を得るのは奇跡に近い。

指揮者はサッカーチームの監督にもたどることができる。いかに日本のサッカー水準が上がったとはいえ、ヨーロッパは世界のプレーヤーが集まる本場。最近は若い日本選手がヨーロッパで活躍しているが、日本人監督がプレミアムリーグやブンデスリガあるいはセリエAの監督になることなど想像もできない。ヨーロッパのオーケストラの音楽監督や常任指揮者になるというのは、まさにこういう世界最高峰のサッカーリーグの監督になるほどの価値があることなのだ。しかも、国立フィルハーモニーというのは代表監督のようなものだから、リーグ監督のもう一つ上のレベルになる。

サッカーもほかのスポーツと同じように、必ずしも名選手が名監督になっているわけではない。いわば名選手は高みを極めたソリスト。ソリストとしての成功は必ずしも監督としての成功を保証しない。現リアル・マドリードの監督であるモリーニョは名監督の誉れが高いが、選手としての経歴はほとんどゼロである。しかし、現場を歩きながら、通訳やアシスタントコーチを務めるうちに、自分の理論や方法を身につけた。Jリーグの監督を見ても、選手として頂上を極めた人はほとんどいない。監督長嶋に失望した人々も、ある意味で納得している。「名選手、名監督ならず」とは長嶋の形容のためにあるような枕詞だが、それはすべての分野で言えることなのだ。会社で断トツの成績を上げた社員が、優れた社長になれるわけではない。

コバケンが合唱に強い理由はいくつかある。まず歌うことが好きなことだ。しかも、声が良い。歌謡曲からオペラまでレパートリーは広い。美空ひばり「悲しい酒」(ドイツ語台詞付き)に始まり、イタリアオペラまで歌う。この遊び心がないと、歌の指導はで

きない。楽器のプロは大概、歌は苦手だ。コチシュが歌ったのを聴いたことはないが、多分、彼の歌唱は聴くに堪えないだろうと思う。

もう一つは、下積み時代のアルバイトである。指揮者として売れない時期に、コバケンは多くの合唱団を指揮する仕事をこなしてきた。武蔵野合唱団や早稲田グリーンクラブなど、多くの合唱指揮の経験がある。それぞれのパートのバランスやニュアンスを調整して、発声から立ち振舞にいたるまで事細かに合唱をまとめ上げることができ、オーケストラ指揮者は稀だ。だが、コバケンには下積み時代の経験が大きな宝になっている。コンサート後の演奏者を称えるショウタイムも、下積み時代を経験した者でなければ思いつかない。

コバケンの2年振りのハンガリー公演はジュール・フィルハーモニー音楽監督ベルケシュ・カールマン(武蔵野音楽大学客員教授兼任)の執念によるもの。ベルケシュがジュールオケの音楽監督に就任した2年前から、数限りないほどの電話を受けた。「何時コバヤシがハンガリーに来るか」、「必ずジュールで振ってくれ」、と。彼の押しの強さには定評がある。知る人ぞ知るで、本人も7度の結婚を果たしたことを悪びれもせず話すが、これほどのマメさと押しの強さがなければ、とても7回も結婚式を挙げる気にはならないだろうと感心する。とにかく、押しに押された私は「コバケンがハンガリーに来たら、必ずジュールへ行くから」と、同じ答えを繰り返すしかなかった。

2011年1月末に小林夫人から「秋にハンガリーへ2週間行けます」という連絡があった。急いでベルケシュに連絡し、ジュールオケの日程を決めてから、他のオケの予定を打診した。ジュールではベートーヴェンの交響曲とストラヴィンスキー「火の鳥」、ブダペストではMAVオーケストラがヴェルディ「レクイエム」をやるということでプログラムがまとまった。ところが、ここからさらに二転三転することになった。

MAVオケに契約書を催促したところ、突如に「ヴェルディはやれない」という。予定

されている10月末から11月1日はハンガリーの祝日で、ヴェルディ「レクイエム」のような大きなコンサートをやれば、経費がかかってもたない。祝祭日のリハーサルには通常の倍の給与を払う必要がある。それをコバケンに伝えと、「なんとしても国立合唱団と一緒に、ヴェルディをやりたいので、実現して欲しい」という返事。ベルケシュにヴェルディをやらないかと持ちかけたが、やはりお金がかかるから難しいという。そこで、コンチェルトブダペストの支配人に打診した。ちょっと時間はかかったが、定期公演プログラムに入れたいという。ベルケシュに「ヴェルディはコンチェルトブダペストやる」と伝えたとこ、急に自分のオケでヴェルディをやりたいと言いだした。これには参った。かくように、芸術家相手の交渉は簡単ではない。

こういうやり取りをしている間に、大震災が起きた。ヴェルディをどこがやるかが決まっていない段階で、ベルケシュは早々と11月1日の芸術宮殿会場を抑えてしまい、他のオケが使えないようにしてしまった。なんと手回しが良い。こうなれば、選択肢は一つしかない。コンチェルトブダペストには「申し訳ないが、ジュールからは2年越しのラブコールがあり、ジュールオケを優先しない訳にはいかない」と事情を話して降りてもらい、ヴェルディ「レクイエム」をジュールオケに回し、当初ジュールオケが予定していたプログラムをMAVオケがやることで関係者の了解をとった。ヴェルディ「レクイエム」はジュールで10月29日、ブダペストで11月1日と決め、このブダペスト公演を震災追悼コンサートにすることも決めた。追悼コンサートの出演者の報酬はなし、節約したお金は義援金に回すことにした。11月1日はハンガリーのお盆の日だから、この日に「レクイエム」で追悼ミサ曲が演奏されるのは願ってもないことだ。

こういう経緯はあったが、ジュールオケは全力を挙げて、ヴェルディ「レクイエム」を実現してくれた。ベルケシュは当代ハンガリーを代表する最高のソリストを編成す

ると約束し、当方からは国立合唱団を使うことをお願いした。MUPA公演では舞台の上に大スクリーンを出し、曲の進行に合わせて、数枚の宗教画(「最後の審判」をテーマにしたミケランジェロとジョットのプレスコ画、ボッショの油絵)がプロジェクターで映しだされた。さらに曲の始まりと終りに照明を落とし、最後にはローソク電球の灯をともすという工夫まで用意された。ジュールオケの舞台芸術監督の企画である。こういうアイデアはやはりヨーロッパでないと思いつかない。しかも、「怒りの日」が始まる曲の展開では、赤い照明に切り替えるという念の入れようだった。

しかし、短時間のゲネプロでは最初と最後のシーンの照明を確認しただけで、それ以上のテストはできなかった。だから、宗教画のプロジェクションも照明も本番一発で行われた。コバケンからは「通してやっていないものを本番でやって大丈夫か。止めた方が良いのでは」と念を押されたが、彼らもプロだから信頼して任せましようとしてもらった。

ジュールのリハーサルで合唱団とソリスト全員が完全に揃ったのは、本番前のゲネプロの時だけ。前日のリハーサルではバスの歌手が欠席、前前日の最初のリハーサルにはソリスト全員が参集したが、国立合唱団は地方公演で参加できなかった。しかし、そこは合唱曲に強いマエストロである。このような変則的なリハーサル2回で、この難しい曲をまとめ上げた。これにはベルケシュも驚嘆していた。

ベルケシュはジュール公演の後に、武蔵野音大オケの指揮のために東京へ戻ったが、MUPAの公演終了と同時に、まだ日本の夜が明けやらぬ時間に電話をくれ、何度も感謝の気持ちを伝えてくれた。「長年の夢が実現した。これは君と僕が協力したからできたのだ」と。12月の「コバケンと仲間たち」の東北公演で、MUPAの義援金がベルケシュからコバケンへ手渡しされる。

(もりた・つねお)

小林研一郎を追って

2011年11月5日(土)小林研一郎先生「追っかけ」の私達はペーチ市にいました。ブダペストから真新しいM6を約200km南下したバラニャ県中心都市ペーチは人口約16万人。ローマ帝国の属州パンノニアであった2世紀初頭ソピアネという名のワイン生産植民地だったこの街は2010年度「欧州文化首都」に選ばれました。コンサート前の時間を利用してゆったり散策すると、晩秋のすっかり黄葉した通りの向こうに「世界遺産」に登録された4世紀初頭の初期キリスト教徒の墓地やオスマントルコ占領時代の名残であるモスク、聖堂、国立劇場、セーチェ二広場を訪れることが出来、正に歴史と文化の香る街を満喫しました。ギリシャ不安から端を発する欧州危機が囁かれる今日この頃、落ち着かない日々を過ごしていた私の凸凹した心はいつしか滑らかな湖面のような平穏を取り戻していました。

コンサートの一曲目は「火の鳥」でした。火の鳥と言えば、手塚治虫か国際救助隊(あれはサンダーバード!?)しか浮かばないクラシック音痴の私でしたが、よく調べるとロシアバレエ団創設者セルゲイ・ディアギレフに依頼されストラヴィンスキーがロシア民謡に基づいて作ったバレエ音楽で、1910年6月25日にパリ・オペラ座で初演されています。不死の魔王カスチエイの庭園で幸運の象徴である火の鳥を見逃したお礼に黄金の羽を貰ったイワン王子がその羽を使って魔法をかけられた王女を助け、舞い降りた火の鳥が魔物達を退治するというのがそのストーリーです。コントラバスの重低音がおどろしく響き不気味に始まると、弦楽器が不協和音にも似た響きを奏で、クラリネットやフルートが幻想的なリズムを響かせ、ハーブの美しい音色を聴いたかと思うとトランペット、チューバ、トロンボーンが抽象画でも描くように音色を重ね合う、正

に混沌とした世界でしたが、ひとたび小林先生の指揮棒にかかると正に魔法のように糸乱れぬリズムと切れの良い和音が私達の心に響きわたりました。まるで火の鳥がゆっくりと湖面から舞い上がるように私の気持ちも浮揚するのがはっきり分かりました。

後半はベートーベン交響曲第3番「英雄」でした。英雄＝ナポレオン位は知っていましたが、これまた調べるとそうシンプル



な話しではありません。ベートーベンには耳の疾患が悪化し音楽家生命が終わる危機に直面し絶望のどん底に落ちたのですが、それでも新しい音楽への凄まじいばかりの情熱からこれまでの常識を打ち破る決死の覚悟でこの曲を創造したのです。これは当時の戦火に打ちひしがれた民衆が新しい時代へと突き進む力も描くこととなり、その象徴として民衆を解放する偉大な英雄であるナポレオンに捧げたものとも言われています。曲の構成としては、演奏時間50分という曲の長さ、葬送行進曲やスケルツォ(諧謔曲)といったそれまでの交響曲

坂梨 正典

からすると異質とも思える融合を図る等革新的です。小林先生の指揮下、素晴らしい演奏を披露するオーケストラ、特に自由に歌うようなホルンの音色は心に染み入り、まさに英雄的で雄大な曲想が私の魂を揺さぶりました。湖面から浮揚した心はまるで勲章のように胸の辺りで熱く光り輝くようでした。

小林先生は日本経済新聞連載「こころの玉手箱」で2011年11月29日から5回に亘り自叙伝を発表されています。小学4年生のころ聞き人生を決めたベートーヴェンの交響曲第9番、将棋棋士羽生善治さんとの交流、決して手放せない指揮棒、お母様の厳しさと愛情、どのお話も大変興味深く読ませて頂きましたが、もっとも印象に残ったのは小林先生とハンガリーの切っても切れないご縁のお話でした。1974年2月音楽雑誌「音楽の友」にブダペスト国際指揮者コンクール応募要領を見つけたのですが、既に締切日をわずかに過ぎていた為断念せざるを得なかったはずが、周囲の助けによりなんとかエントリーしそして優勝、その後ハンガリー国立交響楽団の音楽監督などを努め世界的な指揮者となられたのは周知の事実です。あのときも、コンクールに出場されなかったら今回のペーチコンサートもなかったかもしれません。私としても、ハンガリーに駐在できたこと、小林先生と言う偉大な指揮者にお会いできたこと、ペーチのコンサートまで追っかけることが出来たこと、更には沈んでいた心が幸福感で満ち満ちたことに大いに感謝しています。複雑に絡み合う人々の人生がある時ある場所その僅かな接点を共有できることは奇跡であり運命的だと思います。

次回は是非小林先生のベートーベン交響曲第5番「運命」を聴きに行くつもりです。

(さかなし・まさのり 丸紅ブダペスト)

小林研一郎コンサートを聴いて

酒見 順子



恥を忍んで告白する。私は4月に来洪するまで小林研一郎氏を存知あげなかった。「世界的指揮者」、「炎のマエストロ」、「コバケン」を、である。日本人学校の校歌を作曲して下さった方、という予備知識もなく、家族揃って初めてのクラシックコンサートに臨んだ。小さい子供を連れて行くことで迷惑を掛けるのではないかという不安と、子供に本物のオーケストラの演奏を聞かせてあげたい、という期待が入り混じっていた。まず驚いたのは、当日券を求める人の行列である。そして、開演直前の会場の水を打ったような静寂。ごくりと息を飲む音すら聞こえてしまうのではないかと思った。

指揮棒が振り下ろされヴェルディの「レクイエム」が始まる。演奏が進むにつれ、スクリーンに映し出される映像は宗教的な意味を持ち、想像力をかきたてる。カトリックのミサ曲といっても素養の無い自分には歌詞はもちろん、流れなども解らなかったが、合唱とオーケストラの迫力に会場全体が渾然一体となったように感じた。初めて目にする指揮の様子は、髪を振り乱し、体全体を揺らしながらの大変情熱的なものであった。

コンサートの数日後、小林氏が出演した某テレビ番組を見る機会があった。練習風景の中で、演奏家に「そこはもう少しゆっくりしていただけますか、お願いします」と大変丁寧に伝えている場面が印象に残った。その理由は「一流の演奏家の皆さんですから」というものであった。マエストロともなると高圧的なのでは、と先入観を持っていたが、尊大ぶったところは微塵もなく、むしろ謙虚な姿に感動を覚えた。私はいっぺんに大ファンになった。また、3月の震災後の日本でのコンサートでは終演後、燕尾服のまま募金箱をもってロビーに立ち、募金を呼びかけたと聞く。日本のみならず、海外でも称賛されている方は人格も一流なのだ確信した。

我が家にとって初のクラシックコンサートは不安も杞憂に終わり、何とか無事帰宅した直後に、子供たちはあっという間に眠

りに落ちた。「すごかったよね」と思い出すのは4年生の長男だけで、8歳と4歳の娘にはまだ少し早すぎたのかもしれない。「素晴らしい先生の、素晴らしい演奏を聴いたんだよ」と成長したら伝えてあげよう。今はよく理解できなくても、きっと誇りに思うだろう。娘と一緒に日本人学校の校歌を口ずさむ度、いつかのその日を思い、一人微笑む。

(さけみ・じゅんこ)

灯火とともにヴェルディ「レクイエム」

坂井 圭子



大学時代に歌ったヴェルディのレクイエム。好悪両面において「華麗なレクイエム」と言われているが、私はこの曲が大好きだ。Lacrymosa(涙の日なるかな)の出だしでは、涙してしまう。その旋律は、ずっと頭の中を駆けめぐる。「レクイエム」はローマ・カトリック教会の中心的典例である「ミサ」曲の一つで、個人の縁故者の希望により、個人の死の直後かあるいはその忌日に行う「死者のためのミサ」のことで、墓に眠っている使者の霊が、最後の審判の日に天国に救い入れられるように祈るものとされている。

11月1日は、ハンガリーでも万霊節(先祖を敬う日)である。毎年、ヴェルレクが演奏されていることは知っていたが、そのヴェルレクを小林研一郎氏の指揮で聴くことになった。オーケストラが入ってきた。合唱団が二階正面席にスタンバイした。会場の光が落ちて、スクリーンが降りてきた。マエストロ小林の登場である。その手に導かれるようにチェロのかすかな音が響きだした。第7曲目のLibera me(我を許し給え)・祈禱文朗唱が終わると同時に合唱団が手にしていた灯火が小さくなっていった。静けさが漂った。私は最後までマエストロの魔術の中にいた。

この日のヴェルレクは、3月11日の東日本大震災のためのチャリティーコンサートだった。芸術宮殿は、ハンガリーの人々で埋め尽くされていた。大きな拍手は、被災者への「がんばれ」との励ましだと私には感じられた。(さかい・けいこ)

小林コンサートへ

菊地 茜



高校生の頃、縁があり3年間チェロを弾く機会に恵まれました。しかしその頃は、楽譜を渡され、ただただ音符を追っていたき、時には「弾きたくない」と思うことすらありました。実際、その頃の楽譜ですら手元に無い始末です。その後、音楽とは全く違う分野に進みました。しかし振り返ると、あの時、みんな(オーケストラ)で、一つの曲を弾き終えた時の充実感や達成感、私の記憶の大切な部分で楽しい思い出として残っています。どうやら、私は音楽が好きなのだ気づかされます。

そんな中、機会があればプロの演奏を聴きたいと思っていましたが、時間だけが過ぎていました。それが今回、世界的に活躍されている小林研一郎氏の指揮で、「火の鳥」、「エロイカ」が聴けるチャンスに恵まれ、喜びイタリア文化会館へと行かせていただきました。

「火の鳥」は以前、フィギュアスケートの曲に使用されていたのを聴いたときから印象に残り、一度は生のオーケストラで聴いてみたいと思っていた曲でした。まず、会場に入ると指揮者や奏者と観客の距離の近さに驚きました。演奏が始まる前の緊張感がダイレクトに伝わってきます。その近さは、演奏が始まるとますます私を興奮させました。奏者の表情や指揮者の手の動きまでしっかりと見えます。指揮者の手を見てみると、私まで演奏をしている一人のような気分になり、楽譜もなくエネルギーに髪の手先まで使い表現している姿に目を奪われました。演奏も力強く、管楽器の音の迫力にどきどきです。終わったときの演奏者の表情に、私自身も楽しくなりました。音楽はやはりいいものです。ここ音楽の地ハンガリーにいるのですから、子供達もずっと音楽に触れられる機会をつくり、心のどこかになにかを残せて、いつの日か私のように思い出してくれたらと思います。素敵な時間をありがとうございました。

(きくち・あかね)

妃の街ヴェスプレーム便り その1

Vespremm もみの木の話

森田 友子

はじめまして、ヴェスプレームに在住の森田友子と申します。12年前に初めてこの地を踏みしました。途中、主人の仕事で他国へ移動もしましたが、5年前からはここに腰を据えて生活しています。"住めば都"にしたいという思いで、ハンガリー人の夫と、現在9歳の娘、6歳の息子を育てながら毎日を送っています。これから数回に渡って、ヴェスプレームでの生活について書かせて頂けたらと思っています。

今からかれこれ20年前、植物学者の夫は、趣味と実益を兼ねて、庭でもみ(縦)の木の栽培を始めた。本業の研究職で外国に赴任し、数年家を空けることになったので、他の作物に比べて手の掛からないもみの木はもってこいの植物だった。それから七年後、もみの木たちは2メートル近い、売れ時の綺麗なクリスマスツリーとなっていた。ご存知、アンデルセン「もみの木」は、森の中で晴れやかな未来を待ちわびる。我家の庭のもみの木たちも同じように主人の帰りを待っていたのである。

ここで、販売方法を少し説明させて頂きた



い。庭には、30cmにも満たない苗木から、売れ時の木までがバラバラに植わっているので、売りの木(約170cm以上の木)には、赤いリボンをくくり付けておく。店はクリスマスの10日ほど前に開店し、お客様には庭を歩き

回ってもらい、印のある木の中から好きなものを選択してもらおう。

露店と我家の店の大きな違いは、まずなんといっても新鮮さ。露店で売られているもみの木のほとんどは、森や遠くの地域で栽培されているものなので、遅くとも11月末には伐採されてトラックに積み込まれ町へと運ばれる。だから、イブの日に暖かい部屋に入れられると、すぐに葉を落としてしまう。でも、我家のもみの木は、直前まで土の中で生きていらるので、いけすの魚と言えば解りやすいだろうか、新鮮そのもの。主婦にとって、ただでさえ家事が忙しくなるこの時期に、掃除負担軽減の理由は大きい。もみの木はふつう1月6日に片付けられるが、2月まで見事だった、というお礼を頂いたこともある。香は文句なしに最高だし、色艶の違いも歴然。

もうひとつの魅力は、予約ができること。木を選んですぐ持ち帰る必要はなく、イブ近くの都合のいい時に切ってもらえることができる。集合住宅地で、ベランダからもみの木が吊るされている光景を見たことがあるが、特にマンション・アパートに住む人にとって、2メートル近い木の保管場所を確保するのは至難の業だ。

また、露店では、見比べられるのは数本が限度だけれど、私たちのところでは、自分の足で歩いて何十本、何百本の木を見てから選ぶことができる。ただ、それが逆効果で、数時間掛けて探した末、一体どれがよかったかわからなくなってしまったと、翌日出直す人もたまにいる。

とまあ、こんな理由で、開店してから既に10年以上になるが、ありがたいことにリピーター客が多く、商いは右上がりである。それでも、真面目な主人は、お客様の好みにより一層応えられるよう、努力を怠らない。大半は、絵本に出てくるような左右対称でトウモロコシ形のツリーがお目当てだから、毎年剪定方法を研究している。時々お辞辞でも綺麗と言えない形の木を選んでいかれることもあるから難しいのだが、密かにアメリカへの短期丁稚奉公計画も立てている。アメリカには、100年以上の歴史があり、代々継がれている農場もある。郊外の広い土地にあるの

で、様々なイベントが用意され、週末のレジャー施設となっているところもあるそうだ。

好みも様々だが、お客様そのものも十人十色。稀ではあるが、物々交換を提案され、養鶏場のオーナーから鶏肉を代金として受け取ったり、蜂蜜やアイスクリーム、車の修理で手を打ったりしたこともある。服が汚れてでも自分で切りたいといって軍手をしてくる人もいれば、こどもと一緒にわざわざソリを引いて出掛けてくる人もいる。ハンガリーでは、プレゼントはサンタクロースではなく、エンジェルが持ってくるのだが、もみの木も同様、イブの夜に天使が運んでくることになっているので、選びに来るのはパパ独り、という家庭は結構多い。奥さんと一緒に来て、喧嘩になって帰る夫婦も少なくないので賢明かもしれない。

余談だが、この時期になると、地球環境保護の名目で、レンタル鉢植えツリーの記事をチラホラ目にする。京都議定書・森林 CO2 吸収量の研究者、主人曰く、あれはデタラメ。詳細な分析の説明は控えるが、買う(切る)人がいるから植える人がいる、という単純な方程式を考えても理解できるのではないだろうか。森林伐採だ!と思われていた方、それは誤解です。

こうして書くと、クリスマスツリーファーム、なんておいしい商売、と思われるかもしれない。が、やはり仕事は仕事。春になれば次の世代をせせと補充し、害虫や病気を調べたりしなければならぬし、夏の水遣り・草刈はキリがないし、PHや栄養にも気を配らなければならない。シーズン中は、泥棒さんとの戦闘も待っている。残念ながら、一攫千金、マフィアに近い商いなので、留守中、何百本という木をチョン切られたこともある。それでも、植物が大好きな夫は、この商売だけはやめられない。

妻としては、年に一度の稼ぎ時、万刷を数えるのも楽しみだが、キリスト教最大のイベント、クリスマスに欠かせないもみの木に関われることを、とても誇りに思っている。数日とはいえ、寒い中の外の仕事となるので楽ではないが、なにより、ツリーに対する人々の思いは深くて重く、本当に素敵な商売だと思う。この原稿を提出した翌週、我家のクリスマスツリーファームはオープンの日を迎えます。

(もりた・ともこ)

ジュールに住んで

佐々木 義明

パンのハンガリー名に由来しているようです。

古くはドナウ川の運河貿易で栄えた街です。今でもナポレオンが宿泊したホテルなどが残っています。この東欧の古都ジュールでは、様々な行事がキリスト教徒結びついています。街の中心部にあるイグナチオ教会は歴史も古く、初めてビショップが置かれたと聞いています。

ジュールはブダペストとウィーンの間位置し、ウィーン空港とブダペスト空港へ1時間と交通のアクセスも便利です。また、土地柄かスロバキアやオーストリアから、安い品物を求めてハンガリーに来る買

い物客も多く、週末のテスコやアールカードには外国ナンバーの車が沢山見られます。小さな町ながら、交響楽団やバレエ団、劇場施設なども揃っています。ドイツ系の自動車メーカーが大きな工場を建設していて、経済的にもとても活気があります。今ではすっかりこの街が気に入ってしまいました。

このような特徴をもつ町ですが、ここに住む日本人は数名しかいません。日本人はもとより、東洋系が少なく、テスコや公園でハンガリー人の子供から不思議そうな顔で見られます。我が愛犬のコーギーも当地では珍しいらしく、「何という種類だ?」はまだまして「狐を連れてくるのか?」と聞かれました。ハンガリー在住の邦人の方でジュールを訪れた方は少ないかもしれませんが、ブダペストから日帰りです。先日、ジュール交響楽団のコンサートに



行き、小林先生にお会いする機会に恵まれました。まさにこの町で日本人指揮者のコンサートが聴けるとは思いもよみませんでした。私が子供時代を過ごした仙台も、小林先生の故郷、福島県いわき市も、今回の地震と津波で大きな被害を受けまし

た。ヴェルディ「レクイエム」は震災の犠牲者を悼むコンサートになりました。

チケットは発売と同時に完売だったようです。当日も「チケットは無いが見られないか?」と受付で掛け合っていた人がいました。そのような

方のために、異例の公開ゲネプロが行われました。我が家の大家も小林先生のファンで当日一緒にコンサートに行きました。小林先生の知名度はこの地ジュールでも非常に高いものがあります。

ハンガリーでは仕事の傍ら、暫くご無沙汰していたゴルフを再び始め、趣味のオートバイも楽しんでいます。シドニー駐在時代には毎週ゴルフをしていました。オートバイも16歳から乗り始め、鈴鹿も何度か走ったことがあります。また、日本から連れて来たコーギーに5月、4匹の可愛い仔犬を授かりました。当地の慣習に従い(?)ABC順でAshley, Billy, Charley, Deannaと名付けました。悪戯盛りの仔犬4匹も含め6匹の犬に囲まれて過ごせるのもハンガリーならではのことで。一応、里親捜しはしていますが、半年以上我が家で過ごした仔犬たちに、すっかり情が移ってしまいました。「まあ、6ワンでも良いか」と考えています。里親にご関心のある方はご一報下さい。

(ささき・よしあき ユーシンヨーロッパ)

オートバイのある暮らし

工藤 亮一

オートバイ、単車、モーターサイクル、バイク。日本では様々な呼び方をされるこの乗り物に魅了され早や四半世紀。私のオートバイ生活もこの11月で26年目に突入り、26年目のオートバイ生活はここハンガリーで迎えることになりました。日本ではとなくネガティブなイメージのあるオートバイですが、私にとってはかけがえの無いモノであり、一人でも多くの皆さんにその魅力を知っていただきたいと筆をとりました。

私がオートバイに出会ったのは、15才の春のこと。当時はサッカー部に所属しておりました。10才よりスポーツ少年団にてサッカーを始め、小・中学生の頃はサッカー一色で、高校選手権に出場したいという夢を抱きながらも、高校ではなく工業高専に進学しました。そこで幸か不幸かオートバイと出会ったのです。当時、私の通う高専では歩行大会なる全校生徒参加のイベントあり、近くの山に歩いて上るだけというものでしたが、サッカー部には現地解散後、学校までの13kmの道のりを走って帰るといふ追加の課題がありました。ゴールキーパーというポジションは瞬発力が要求されても持久力は要求されません。私は持久力に全く自信がありませんでした。案の定、5kmも走らないうちにバテてしまい歩くことになりました。いつまで経っても帰ってこない私を心配した4年生の先輩が、愛車のスズキGSX400FSインパルスを駆って私を迎えに来てくれ、私をタンデムシートに乗せ、学校まで連れて帰ってくれたのです。当時は「あ～良かった、助かった」ぐらいにしか思いませんが、そこから沸々とオートバイに対する憧れが膨れ上がりました。

それから半年後、16才になった私は原付免許を取得しました。同時に新聞配達を開始しました。当時、姉が所有していたホンダイブというスクーターを駆っての配達です。このアルバイトで貯めたお金で、私は愛車第一号となるヤマハRZ50を手に入れ、そこから25年以上続くオートバイ生活が始まりました。近場のワインディングを「攻める」ことが好きだったので、ツーリングに

はそれほど興味がありませんでしたが、3ヶ月に一度くらいは友人らと出かけていました。九州出身なので熊本や大分方面へはよく日帰りで行ったものです。しかしなぜか今もって思い出すのは、雨が降ってきた時のこと、すごく寒かったことなど辛いことばかりです。逆に、天気が良いくて快適だった時のことはほとんど思い出せません。不思議なものです。

オートバイは雨風をしのいでくれる屋根がありません。気温が下がれば寒い思いをしますし、雨が降るとヘルメットが曇って視界が悪くなり、また路面が滑りやすくなるので運転には細心の注意や緊張が要求されます。しかしそれでも乗りたいと思わせる「何か」があります。

私が住んでいた中部地方から九州へオートバイに里帰りした時の話です。奈良県に入った途端、とても激しい雨に遭遇しました。レインウェアを着る暇も無くビショ濡れです。4月末の頃でそれほど寒くなく、そのまま走り続けました。走り続けているとそのうち雨はあがり、晴れ間も出てきました。濡れていた服もだんだんと乾いていき、今度はとても心地よい状況に変わっていききました。その時の嬉しさは15年以上経った現在でも鮮明に思い出されます。最初から天気が良ければ、雨に遭遇することが無ければ、私はこの15年以上も忘れることができないう嬉しさを感じることはできなかったでしょう。何となくオートバイに大切なことを教えてもらった経験でした。

オートバイでのツーリングは新たな出会いをももたらしてくれます。見知らぬ人と会話する機会に恵まれます。もちろん名も知らない者同士ですが、旅先での見知らぬ人との会話はその旅に彩りを与えてくれます。つい先日ハンガリー国内でのツーリング中、道端で停車し休憩していたところ、見知らぬライダーが私の横に停まりました。彼はホンダのオートバイに乗っており、「日本のオートバイは品質が良い」、「いい仕事をしている」と言ったようなことを私に言い、「どこから来たのか？どこに行くのか？

オートバイは2気筒に限る(彼のオートバイも私のそれも2気筒)」などと会話を交わし、去っていきました。もう二度と彼に会うことは無いかも知れません。しかし私の記憶に彼の存在は残り続けます。なんて素敵なことだろうと思ってしまいます。

ハンガリーのライダーは同じライダーに対しても好意的です。ライダー同士は道ですれ違う時に互いに挨拶をします。日本ではピースサインと呼ばれますが、日本ではこのサインを交わすことが稀になってきていました。しかしハンガリーでは違います。ほぼ9割方のライダーがサインを交わします。日本のようにピースでは無く、左手をハンドルから離して手をあげる程度ですが、彼が自分を同じライダー仲間として認識していることが十分にわかります。ハンガリーは熱いライダーが多く、私もしばしば物凄いスピードで抜かれることがあります。恐らく「ふわわ」km/hを超えるスピードと思われるが、そんな時でも追い抜く間際に私に挨拶をくれます。何て素敵なことだろうと思います。

いいことばかりを書きましたが、もちろんオートバイには転倒、事故による高いリスクがつきものです。私自身、転倒経験が何回かありますし、悲しい経験をしたこともありました。しかしリスクの高さもオートバイの魅力の一つではないかと思うようになってきました。高いリスクを認識した上で自らの操作技術、状況判断力を高め、いかにしてこれを回避し、その先にある素晴らしい何かを手にするか。そうしたことも魅力の一つだと思っています。

ハンガリーは確かに日本に比べて事故リスクが高いと思われませんが、オートバイ生活26年目を迎える私は、ここハンガリーでまた新たなオートバイの魅力を見つけるとともに新たな出会いを探す為、春の到来を心待ちにしております。

(くどう・りょういち イビデン・ハンガリー)

学ぶことは楽しいことだ！

藤田 未来

私は、ハンガリーで二つ習い事をしていきます。クラシックバレエとハンガリー語です。

これは、私が通っているバレエ教室での1コマです。「Muti Miki!」

今日も先生の声が教室に響きます。これを言われると、前に出て、バレエの手本をみんなに見せなければいけません。「ええ、私!?できないのに。先生勘弁してよ」と思う反面「これはがんばらないと」と、いつもよりぴんと背筋を伸ばし、上がらない足もできるだけ高く上げ、緊張しながら踊ります。先生の言葉はまだまだ続きます。「もっと床を押して。つま先を伸ばして」言われるたびに「そんなことができたらプロになるって」とつつこみながらも、意識をつま先に集中させながら踊ります。そして、「ほら見てごらん。ミキはハンガリー語が分からなくなつて、ダンスについて私の言っていることをよく理解している」とひと言……。照れくさいなと思いながらも、うれしさがこみあげ、思わずにっこりし、「よし次も気をつけて踊るぞ」と気を引き締めます。

幼い頃は、「こんな風に踊れるようになりたいな」と無邪気に練習したバレエも、大人になるとなかなかそうはいかないものです。素質、年齢とそれに伴う体力の減退、自分を取り巻く環境など様々なことを考慮し、無難にこなすことに重点を置くようになっていきます。私の場合も技術の向上というよりは、現状維持や運動不足解消のためというのがバレエを習っている大きな理由でした。指導者にしても、大人には手加減して教えることが多いです。バレエに親んでもらえればよいということが目的になるので、内容もそれに見合ったものになります。しかし、アンドラッシュ先生のレッスンは、大人であっても容赦なしです。小さい子がする基本練習を徹底的にさせ技術の向上に努めます。そして努力している人には、みんなの前で手本をさせたり、言葉をかけたり、それを認める場をかならず与えます。

ハンガリーに来たこの3年間で、「やっぱりバレエって楽しいな」という思いが以前よりより一層強くなりました。楽しいからもつと練習したくなる→練習すると筋力が付く→筋力が付くとできることが増える→できることが増えるとまたバレエが楽しくなる。という訳で、驚くべきことに、この歳になって、私のバレエ技術が少しずつ上達しているようなのです。



さて、私のもう一つの習い事はハンガリー語ですが、ハンガリー語レッスンの私は、いわゆる、やる気のない生徒です。どんな風かと言いますと、習った言葉を覚えようとしないし、簡単な単語をすぐに忘れてしまいます。何度も同じことを質問します。先生には仕事の忙しさを理由にして「宿題は出さないでほしい」とお願いしているくらいです。自慢には決してなりません。先生にとっては「ふう」とため息が出るような生徒だと思っています。

では、そんなにやる気がないのに、なぜハンガリー語を続けているのか。それは、ハンガリー語を勉強するのが楽しいからです。そんなやる気がないのに「まさか」と言

いたくなりますが、本当なのです。ゾリ先生との授業は、とても楽しいです。先生は、ハンガリー語だけでなく、ハンガリーの人達が考えていること、今流行っていること、問題になっていることなど、様々なことを話してくれます。先日は、「味良し、値段良し、雰囲気良し、店員良し」のカフェを教えてもらいました。そのカフェは今では私のお気に入りです。

日本人の中で働く私にとって、ハンガリーという国や、その生活、考え方を知ることができるハンガリー語のレッスンはとても興味深いものです。そして私が最も感心すること、それは先生が私に、今まで一度も、「できていないね」というような言葉をかけたことがないことです。私がどんなに単語を覚えていなくても、どんなに同じ質問をしても、決して嫌な顔をしたりため息をついたりせず、何度でも根気強く教えてくれます。覚えていたことには「いいよ!」とほめてくれます。もし先生に「○○しなければいけない」ということを言われていたら、私は今ごろハンガリー語をやめていたかもしれません。自分のハンガリー語力のなさにいつも落ち込む私ですが、ふと街で耳にした言葉や、テレビから聞こえる言葉で聞き覚えのある言葉が出てきます。確認してみると以前教わった言葉です。「なるほど、こういう意味だったのね」と納得し、うれしくなります。そして、聞き取れていた自分のハンガリー語の力に驚きます。そして「よし今日はちょっと単語でも見直してみるか」という前向きな気持ちになるのです。

二人の先生は、私に自らが学ぶきっかけを与えてくれたように思います。学ぶことは楽しいことです。楽しければ、続けることができます。続ける力になります。力になると自信がつきます。自信がつくともっと楽しくなります。

これから場所が変わっても、年をとっても学ぶこと続けていきたいと思えます。「学ぶことは楽しいことだ!」

(ふじた・みき 日本人学校)

留学生自己紹介

4年間で得たもの

リスト音楽院 ピアノ科 山田 真理子



ハンガリーに留学して早4年、四度目の寒い冬を迎えました。留学当初は戸惑うことも多く、生活に慣れること、レッスンについていくことで精いっぱいだった毎日比べ、今ではここで音楽に没頭できることを心から幸せと思えるようになりました。

留学1年目はパートタイム生として、修士課程入学試験の準備期間として始まりました。留学前のソクライ・バラージュ先生との出会いが、ハンガリー留学の決め手となったので、その先生の元で勉強できる喜びはこの上ないものでした。厳しいレッスンに耐え、留学2年目には無事、修士課程で勉強できることとなりました。この2年間は毎日が時間との闘いでした。レッスンは週に1回から2回と増え、さらに室内楽のレッスン、いくつもの授業を取らなければなりません。練習時間が削られ、曲のペースは増す。年2回の実技試験に卒業試験。いかに効率良く、質のいい練習をするかが課題になりました。時間がないから曲を仕上げられないなどという甘えは許されず、こうした厳しい環境があったからこそ、強くなれたのだと思います。

そして修士課程2年目。卒業試験という大イベントが私を待ちました。兼ねてから卒業演奏で弾きたいと思っていた大曲を取り入れ、出来上がったプログラムは大変難しいものに…。結果的に、反省すべき点が多く残る卒業演奏会となりましたが、2年間修士課程で学んだことへの達成感を得られ、次へのステップにつながる大事な機会を与えていただけたと思います。私にとって留学最後の年となる今年、パートタイム生として勉強する毎日が続いています。修士課程の2年間は時間に追われ、さまざまなレッスンや授業から学ぶことが多かった反面、コンクールを受ける余裕や時間がなく、レポートもなかなか増やすことができませんでした。この最後の1年は、コンクールをできるだけたくさん受け、多くの曲をこなす「挑戦」の年です。

この4年間の留学生活で得た一番の財産は、恩師との出会いです。私は譜読みが大の苦手で、頭の回転も遅く先生の注意に瞬時に対応することもなかなかできません。そんな私に諦めることなく一生懸命指導してくださった先生方がいてくれたからこそ、今の私があるのだと思います。そして、音楽に対して決して妥協しない姿勢、すべての音を完璧にコントロールし、作品を建築のように作り上げていく構成力。音楽に欠かせない基本を私に叩き込み、また間近ですばらしい演奏を聴かせてくださった先生方に心から感謝しています。

留学当初に感じたさまざまな驚き、喜びは今でも変わりません。ハンガリーのアパートには防音設備がなく、苦情が出て苦い思いをしたこともあります。でも、ほとんどの住民の方々が、長時間の練習を温かく受け入れてくださっています。こうした温かい想いやクラシック音楽に対する理解など、ハンガリー人みなさんに感謝する毎日です。これまで私を支え、応援してくれた家族や友人への感謝と共に、素晴らしい環境の中でピアノに触れられる喜びを噛みしめています。残り少ない留学生活、より一層の努力と挑戦を続けていきます。

ブダペストに来て5年

リスト音楽院大学院 ヴァイオリン科 上杉 典子

今年6月にBA課程を卒業し、この秋からMA課程に在学しています。学部に入学した頃は慣れない英語での専門的な授業や意思表示の難しさに焦りや不安の連続で、後悔することもありました。それでも週2回の実技レッスンでの熱心な指導だけでなく、充実した室内楽のレッスンを受けるうちに、いつしかそんな感情も無くなっていました。とくに室内楽との出会いは私自身の音楽に対する視野を広げる大きなきっかけになりました。素晴らしい先生方とのレッスンで心から音を楽しむという、音楽本来の楽しさを味わい、友人たちと意見を出し合いながらひとつの音楽を作っていく演奏する楽しさも知り、かけがえない友人たちもできました。学期末にはクラスコンサートがあり、演奏する機会がたくさんあります。緊張した中で演奏することは、日常のレッスンや練習などでは気づかない自分自身の弱点や課題がたくさん見つかり、毎回とても勉強になっています。ハンガリー人の演奏を聴いて私が一番驚いたことは、自分の音楽を自由に表現し、それぞれが本番を楽しんでいることです。これは今までの私には無かった感覚でした。

レッスンや音楽史などの授業で勉強したハンガリーの作曲家のオペラを、実際にオペラ座で鑑賞したり、著名な演奏家のコンサートを気軽に行ったりするなど、より一層充実した学校生活を送っています。生活にも慣れた頃から、ハンガリー以外の国にも行くようになりました。ウィーンやプラハなどで実際にウィーンフィルやチェコフィルのコンサートへ行き、建造物や絵画をたくさん見ることで、今まで映像や写真などでしか見ることのなかったものを生で感じることに素晴らしい気づかされました。このような経験は私自身のかけがえのないものとなっています。

ブダペストに来て5年が経ちました。来た当時はまだ10代で留学することの意味など全く分からず、自分の意思というよりも両親の勧めで留学しました。一人で生活することに慣れるまで大変でしたが、友人たちに本当に助けられました。毎日の生活の中で友人たちと、音楽や学校のことをたくさん話すことで、自分自身を見つめるきっかけにもなり、音楽に向き合う姿勢など多くのことを学びました。

この5年間、音楽だけでなく、さまざまなことを経験し、留学することの意味や素晴らしさを知ることができました。何もわからなかった私の背中を押してくれた両親にはとても感謝しています。リスト音楽院での学生生活はまだ1年以上残っているので、その間に、ヨーロッパでしか味わえない感動や経験をたくさん積み、それを音楽の生かし、より多くの人に音楽の楽しさや感動を与えられる演奏家になれるように頑張っていきたいと思っています。



緑の丘補習校

中野 明日香

以前、講師として働いていた場所に、今は保護者として通っている。

この補習校に通う子どもの多くが二重国籍の子、又はブリティッシュやアメリカンスクールに通う日本人の子ども達、ハンガリー人の子どももいる。一年生になった息子は前者。日本語は話せるものの「国語」に対して苦手意識が強く、毎週ドッサリ出る宿題の度に「できない」、「分からない」と泣いたり、怒ったり。正直親の方が大変…。

平日はハンガリーの小学校、土曜日は補習校。そんな話をハンガリー人の知り合いにしたものなら「かわいそうに」などと言われてしまうのだが、当の本人は補習校には喜んで通っている。その補習校でバザーが開かれた。私達保護者は二か月くらい前から準備を進め、保護者会の度に意見交換。私を含めバザー係りになっている三人は仕事をしているので、各自が空いた少しの時間を使って頻りにメールのやり取りをした。

バザー当日は息子だけでなく補習校の子ども達はまるでお祭りを待つ様な、落ち着かない様子だった。一年生達は休み時間の度に準備に追われる保護者達を見に来ては、おもちゃを見つけ、更にテンションを上げて遊んでいた。今まではお客としてしか知らなかったバザー、開催する側はこんなに大変だったのだと準備の段階で何度も感じた事だったが、それともうひとつ強く感じたことは保護者間のチームワークの良さだった。父親も母親もハンガリー人も日本人も、各自ができることを進んでやり、みんなで協力し合った。だからこそ今年も沢山のお客さんを迎えることができ、大成功という形で終わったのでは無いかと思う。



元々はこの補習校も二重国籍の子供を持つ親が中心となり立ち上げたもの。運営も日本への教材発注も会計も行事も保護者が役割分担しているので、裏を返せばチームの良さも無くてはならないもの、必要不可欠なのだ。

ハンガリーで育つ子どもの達に日本語の教育を…。そんな親心からできて講師の先生方のお力を借りながら成り立つ補習校。日本に居れば当たり前を守られていることが海外ではそうではなくなる。「国語を勉強する」ということもそのひとつになってしまう。それはある意味、親次第ということになる。

そんな補習校に通う日は、日々の生活の中で滅多に日本人と会わない私にとって、ちょっとした息抜きの時間にもなった。日本人ママ達とのおしゃべりは、いつもぱっと花が咲いたような楽しいひと時。バザーの際、ハンガリー人夫達も自然と集まって話をしていたように、同じような環境に身を置くもの同士、他愛もない話も相談事もちょっとおしゃべりできることは、ほっとする瞬間でもある。

そして、この環境に身を置く子ども達。二つの言葉の中で生きている子ども達。きっと今は深く考えないでただ与えられた道を歩いている、という状況だろう。

読み書きができて、国語力が付けば子ども達の将来の可能性はぐんと広がる。

大変だけど、頑張らないといけないけど、それがいつか、宝物になりますように。

そして、友達とワクワクしながらお店を出したり、おもちゃを買ったりしたバザーも、あんなこともあったなあ、といつか微笑みながら思い出せるような思い出のひとつになってくれますように。子ども達の無邪気な笑顔を見ながらそう願わずにはられない。

ブダペスト日本人学校 小学部・中学部 入学説明会のお知らせ

ブダペスト日本人学校では、下記の通り「平成24年度 小学部・中学部新入生説明会」を行います。説明会への参加、または入学を希望される方は、一度、下記アドレスまでご連絡ください。メールにて、詳細等をお知らせいたします。何かお尋ねになりたいことがありましたら、お気軽に担当までご連絡ください。

日時: 平成24年1月21日(土) 10時～ 場所: 日本人学校2階ホール
問い合わせ: bpjpschool@bpjpsghool.hu 電話: +36-1-392-0360 担当: 田栗 広基



水球 オリンピックに向けて 長沼 敦

4年に1度の世界を巻き込むスポーツの祭典、オリンピックを来年に控え、「五輪熱」が徐々に高まってきているように感じます。スポーツ好きのハンガリーでは、メダルの期待がかかるキャック・カヌー、フェンシング、陸上・投てき競技、柔道、レスリング、競泳などに注目が集まっています。

そして、忘れてならないのが水球です。2000年のシドニー大会から、アテネ、北京と3連覇を成し遂げている男子のナショナルチーム。夏季大会、チーム競技史上初となる4連覇に大きな期待がかかります。

しかしながら、その道程は決して楽観視できるものではありません。ここ数年の主要な国際大会では、2010年のヨーロッパ選手権4位、2011年の世界選手権においても4位と、メダルすら逃している状況なのです。

12年間何人ものメンバーが入れ替わる中で、活躍し続け3連覇を成し遂げた選手は6人います。彼らはまだ現役でありながら、既に伝説の選手と呼ばれています。

なかでも、キャプテンを務めていたベネデック選手は、チームの精神的な柱でした。彼は北京五輪を最後に代表チームから退いています。柱を失い、結果が出ていないチームを、12年間チームを率いてきた名将ケメーニ・デーネシュ監督がどう立て直していくのか。それが前人未到の偉業達成への鍵となるでしょう。

日本代表チームは1984年のロサンゼルス大会以来、オリンピック出場が遠のいています。ですが、今回その壁を打破しようと、日本水球は強化を推し進めてきました。

最後のオリンピック挑戦は、2004年のアテネオリンピックに向けたアジア予選。カザフスタンで行われ、決勝まで進みましたが、地元カザフに2点差で敗れ切符を逃してしまいました。

その当時、若手のメンバーとして出場していた私たちに、ベテラン選手が試合後の夜に、「あとは頼むぞ、がんばってくれよ」と声をかけてくれました。日本では、水球を続けたくともプロリーグがあるわけではなく、泣く泣く競技を引退してきた才能あふれる

選手がたくさんいます。職場に頭を下げ、嫌な顔をされながら仕事をぬけ、合宿や遠征に参加し、水球オリンピック出場に懸けてきたベテラン選手たちの言葉は、今でもずっと胸に焼き付いています。

その後、順調に進んできたかという、決してそうではありません。オリンピックが最も注目される水球ですが、北京五輪では実力が不十分とされ日本の連盟が予選不参加を決定。それを知った社会人選手の中には、引退を決めた人たちが多数いました。また、外人コーチを招聘しては、文化や言葉の違いを乗り越えることが出来ず、長期的な強化には繋がりませんでした。

そんな中でも、あきらめずにヨーロッパ・プロリーグでの武者修行を続けた選手や、また別の選手は本格的な社会人チームの発足に奔走して実行し、それらに引きつけられた若手選手は国内でのレベルアップに励み、結果的にその3つがうまく絡み合い強化され、今年の夏に行われた世界選手権では過去最高の11位の成績を収めました。また大学生のオリンピック、ユニバーシアードではハンガリーやイタリアなどの強豪国から勝利を収めるなど、今年に入って目覚ましい成果を挙げています。

ずっと結果が出せない中でも、支援を続けてきて下さった方々や、応援し続けてきて下さった方々もたくさんおり、みんなの力が混ざり合って、日本の水球界が一丸となって、ロンドンオリンピックの出場を勝ち取ろうとしています。

世界選手権11位はアジア最上位です。アジアでは五輪出場枠が一つなので、現時点で日本がオリンピックに最も近い位置にいることになります。2012年1月に千葉で行われるアジア選手権兼オリンピック予選で優勝し、目標としてきた五輪出場を是が非でも達成したいと思います。

ぜひご親戚やご友人の方にも宣伝して頂き、多くの応援よろしくをお願いします!読んで頂きありがとうございました。

*ロンドン五輪アジア地区予選 1/24~27千葉県国際総合水泳場
詳細はポセイドンジャパンHPにて (<http://poseidonjapan.net/>)

(ながぬま・あつし)



水球への挑戦

曲山 紫乃

ハンガリーの水球

私は、今、センチシュで水球をしています。大学に入った頃、私は、卒業後は就職しようと考えていましたが、その気持ちはだんだん変わっていきました。毎年1度は行なわれる日本女子代表チームの試合で負けることが続き、1勝することができなくなっていたからです。周囲には負け癖がついていると言われていました。勝ちたいのに勝てない。どうしたら勝てるのだろう。海外の水球はなぜ強いのだろう。海外の水球にとっても興味はわくようになりました。

日本にはプロチームはありません。大学卒業と共にほとんどの選手が引退してしまいます。残りの選手は、仕事をしながら練習時間、場所を見つけてなんとか続けているというのが現状です。大学卒業後に続ける環境がないのも日本水球が発展しない原因のひとつでもあります。社会人は学生のようにしっかりとトレーニングができず、レベルアップどころか現状維持をするのも精一杯になってしまいます。それでは、世界で勝つことができなれないと思い、私は海外に挑戦しようと決意しました。

多くの人に協力をしてもらい、海外のチームをあたってみましたが、日本の女子チームには実績も実力もないこともあり、なかなか行き先が決まりませんでした。その中で、現在ハンガリー男子1部リーグ、エゲルで活躍している長沼敦さんにお話をしたところ、ハンガリーのチームを紹介していただきました。

昨年の秋からハンガリーにきてSzentesi Vízilabda Klubに所属しています。センチシュはハンガリーの南部チョングラード郡にあり、人口は約3万1千人という小さな町で、日本人は私1人です。ガイドブックや地図にも載っていないような町ですが、水球、サッカー、空手などスポーツが盛んな街です。

その中でも女子水球はタイトル獲得、オリンピック選手を輩出という実績があります。近年も常に国内の上位という強豪チームのひとつです。昨シーズンはハンガリーカップで優勝、リーグ戦は準優勝、LENTロフィー(ヨーロッパクラブのカップ戦)でベスト4という結果でした。10月から始まった今シーズンは、ハンガリーカップで準優勝。リーグ戦は4勝1引き分けで唯一負けなしのチームです。

そのチームの中で私は小さい選手とされています。身長が166センチある私は、日本チームの中では大きいほうなのですが、ここでは逆です。ほとんどの選手は170センチ以上、大きい選

手は、180センチ以上と男子並みの体格の選手もいます。激しいコンタクトプレーが多く、水着が破れてしまうこともある“水中の格闘技”水球は、体重制限がある競技ではないので手足も長く、体格のいいハンガリー人の中でプレーするのは困難です。

昨シーズンは、あまりにもレベルの違う中で思ったようなプレーができず、自信をなくしてしまうこともありました。日本で入るシュートが、ハンガリーではなかなか入らない。相手につかまれて動けない。など、課題がたくさん見つかりました。しかし、世界のレベルを経験したことで、高い目標を設定することができました。今シーズンは、課題を自信に変えていけるように取り組んでいきたいと思っています。



撮影: Andr  L szl 

オリンピック

日本で水球は競技人口も少ないマイナースポーツですが、男子は1900年第2回パリオリンピックから正式種目として採用され、球技としてはサッカーと共に最も古いスポーツです。

2012年のロンドンオリンピックのアジア地区予選が1月24日~27日に、千葉国際総合水泳場で行なわれます。男子は中国、カザフスタン、クウェート、香港、女子は中国、カザフスタン、香港と戦います。男女共にアジアのオリンピック出場枠は

1つだけです。

男子が出場できれば1984年ロサンゼルスオリンピック以来28年ぶり8回目の出場となります。女子は2000年のシドニーオリンピックより正式種目となっていますが、日本女子は今回、初めてオリンピック予選に出場します。

オリンピック予選ということもあり、例年より合宿が行なわれてきました。私もこちらでの試合が終わり次第帰国し、チームに合流します。大会までの1ヶ月間、短い期間しかありませんが、オリンピックの出場権を手に入れるために全力で取り組んでいくのみです。一番大きな壁である中国の女子チームは、2011年世界水泳で準優勝、世界の女子水球界でもトップグループにいる強豪国です。大きな体でパワフルな中国を相手に、体が小さな私たちは1対1では、どうしても力負けしてしまいます。しかし、そこは、私たちの連携プレー、組織力で戦うしかありません。そこを1ヶ月でどこまで調整していけるかが鍵となります。

日本で開催される国際試合。今の私たちを見てもらえる、知ってもらえるチャンスだと思っています。体が小さな私たちでも世界で戦うことができるということを見てもらい、水球がしたい、水球を応援したいとより多くの人に思ってもらいたいです。サッカーのなでしこジャパンのように明るいニュースを届けられるよう、そして、日本の女子水球を多くの人に知っていただけるように頑張りますので、是非応援を宜しくお願い致します。

(まがりやま・しの)

スポーツ・エッセイ

面白くなってきたテニス界

盛田 常夫

男子テニスも女子テニスも、俄然面白くなってきた。女子は四大大会の優勝者がすべて異なったように、上位選手の争いが熾烈である。他方、男子の4強状態は変わらないが、ナダル時代到来かと思ったら、2011年はジョコヴィッチがダントツの強さをみせた。2011年10月末の時点で最後まで戦って負けた相手がフェデラーと錦織圭の二人だけ。ところが、この後ジョコヴィッチは背筋の故障で調子が悪く、8人で争う11月末のATPファイナルでは2敗して敗退し、フェデラーが163万ドルの無敗優勝賞金をかささらった。ジョコヴィッチとマリーが故障、ナダルが不調で、けがに強いフェデラーが若い3人の前に立ちはだかるという構図になっている。また、これだけのパワーテニス時代に日本人が分け入る隙はないと思っていたが、小柄な錦織が活躍しているのがうれしい。2012年はトップテン入りを果たしてもらいたいものだ。

フェデラーはなぜ強い

それにしてもフェデラーの強さはどこにあるのだろうか。彼のプレーを野球のピッチャーに例えると、直球が150km前後で球種がきわめ多彩でコントロールが良く、簡単に打てない(勝てない)ということだろうか。ナダルの場合は、直球にそれほどの威力はないが、高速スライダのコントロールが抜群に良い。マリーとジョコヴィッチはよく似ているが、双方とも直球は155km前後と速く、球種の多彩さはないが配給ミスが少ない。

すべてのボールゲームと同じで、テニスの球種もボールの回転による変化だ。前回転するスピン系、後回転するスライス系、無回転のフラット系をフォアハンドとバックハンドで打ち分けながら、クロス、逆クロス、ストレートの三コースにコントロールする。野球のように横回転(シュート系とカーブ系)を通常の体勢で打つことはないが、追い込まれて極端な変化をつけなければならないケースでは、スピンに横回転を付けて打つことがある。

フェデラーは一球ごとに違った球種で返球する。スピン系一本やりのナダルと好対照だ。力戦型ナダルの肘と膝に負担がかかり、力で押すマリーとジョコヴィッチは肩や肘の故障

を抱えている。それにたいして、フェデラーには大きな故障がない。それは打法の合理性と球種の多彩さが無用な力を節約してくれるからだ。長期にわたってトップに君臨できる理由である。

2012年の男子テニスはどう展開するのか想像もつかない。マリーやジョコヴィッチの故障が長引けば、再びフェデラーがトップの座を奪うことも予想される。ナダルは球足の遅い全仏オープンを照準に戻ってくるだろうが、球足の速い全豪とウィンブルドンの行方が興味深い。

2008年に衝撃的デビューを果たした錦織が肘の故障から復帰し、2011年のトップランク10人のうち、5人に勝利したから実力は本物だ。錦織は非常にクレバーで勝負強い。これはたいへん大切な要素だが、難点は体力が続かないこと。今の体力ではグランドスラム大会で4回戦以上に勝ち上がることが難しい。それが課題だ。

伊達はどうなる

2010年はまさに伊達イヤーだった。トップテン前後の選手が皆、伊達の餌食になった。伊達は左利きだったから、両手打ちのバックハンドは威力があるし角度もあるが、フォアハンドはほとんどフラットに合わせるだけ。ライジングを打つので、相手の打球の勢いを利用できるという利点はあるが、タイミングの変則性以外に威力はない。パワーテニス全開の時代にまったく不釣り合いなテニスなのだ。ところが、この変則テニスが上位選手に有効だった。

伊達と初めて対戦した選手はみな戸惑った。サービスも打球も緩いので、力で抑えつけようとする。ところが、しつこく返球されるので、向きになってさらに力づくになる。こうなると、伊達の思うつぽで、相手のプレーが雑になる。こうして、力で抑えつけてくる上位選手は、皆、伊達の前に自滅してしまった。

ところが、2011年の伊達はほとんどのWTAトーナメントで1回戦負けし、ランキングも急落してしまった。相手にじっくり見られてしまったからである。初対戦で戸惑い自滅した上位選手たちは、落ち着いて処理すればな

んともない相手だということが分かってきた。こうなると、伊達にはきつい。相手をじらす心理戦にもっていけない。いまさらパワーをつけるトレーニングでもないだろうから、2012年も伊達には厳しい戦いが待っている。

1991年のデビュー戦。ロスアンジェルスヴァージニアスリム予選から決勝まで勝ち上がり、セレシュ・モニカと対戦したのを偶然にテレビで観戦した。女子テニス界に君臨するセレシュと対戦している日本選手がいるのに驚いたのを覚えている。その彼女が昔のテニスで現代のパワーテニスと戦っている。タイムスリップの夢をみさせてくれる伊達に感謝したい。

女子はクヴィトヴァ時代到来か

2011年のウィンブルドンで制し、年末のWTAファイナルを制したチェコのクヴィトヴァはランキング2位で2011年を終えた。大きな体躯に似合わず、ストローク、フォア、バックともに安定していて、両手でスライスを打つなど器用なところもある。しかし、何と言っても最大の武器はサーブだ。185cmはあるうかと思われる上背のサウスポーから繰り出される速いサーブは女子選手には厳しい。同じくチェコ出身で一時代を築いたナブラティロヴァのような男性的プレースタイルだが、体もプレーも一回り大きい。大器として大成する素質もっている。

今のところ、彼女に真正面から対抗できそうなのは、ベラルーシのアザレンカ。やはり、180cmを超える体躯だが、彼女はストロークプレーヤー。シャラポフのように、ロシア系の選手はメンタル面で弱いという印象が強いが、アザレンカは勝負強く、ストローク戦で自分から自滅することはない。

この二人にたいして、ランキング1位のヴォズニアキの影は薄い。いまだグランドスラムのタイトルがなく、アザレンカとよく似たタイプだが、アザレンカほどの勝負強さがない。2012年にも彼女がトップランクであり続けることはできないだろう。

(もりた・つねお)

4ヶ国対抗親善ゴルフ大会

平松 達久

ハンガリー日本人ゴルフ部の年間行事のメインイベントの一つに「4ヶ国対抗親善ゴルフ大会」がある。これは、オーストリア、チェコ、スロバキア、ハンガリーの近隣4ヶ国の日本人ゴルフ部代表メンバーが各国の名誉とプライドを賭け、日頃の鍛錬の成果を競いあう親善コンペであり、毎年熱い戦いが行われている。

第1回は2005年に開催され、今年2011年で第7回目を迎えた。幹事は各国持ち回りで、オーストリア⇒ハンガリー⇒スロバキア⇒チェコの順。各年の各国の参加人数にもよるが、団体戦は例年上位5名から8名のグロススコアの合計にて順位を競うガチンコ勝負、個人戦は参加者全員によるダブルベリア方式のコンペとなっている。団体戦は、第1回はオーストリアの優勝で始まり(との伝承)、第2-3回はハンガリーが連覇、第4-5回はスロバキアが連覇、第6回はチェコが念願の初優勝、今年の第7回は開催国スロバキアが優勝しており、ハンガリーチームは過去4年残念ながら優勝から遠ざかっている。

近年、各国ともユニフォーム・帽子の色を統一し、チームワークを高めて、大会に臨んでいる。我がハンガリーチームは、帽子とポロシャツを赤で統一、チェコチームとオーストリアチームはポロシャツをそれぞれ、黄色と水色に統一、スロバキアチームは白いシャツにて揃えてきている。

さて、強豪メンバーを揃え、戦力的には毎年優勝を狙えるハンガリーチームながら、ここ数年優勝を逃している要因がある。大会は通常日曜に開催されているが、土曜日に開催、ゴルフ場での練習ラウンドを行う為、自国開催の場合を除き、気合を入れて前日から現地入りをするようになる。例年、我がハンガリーチームはバスを1台チャーターし、土曜の朝にブダペストを出発し、現地での午後の練習ラウンドに向かう。日頃は自分の車でゴルフ場に行くのでゴルフとアルコールは切り離されているものの、この大会の時だけは、運転の必要がない為、また気の合う楽しいメンバーが揃っていることもあり、朝バスに乗り込んだ時から前夜祭(前朝?祭)が始まってしまふのである。



に、翌日の目標スコアを宣言する(もちろん、アルコールも入り、目標は高くなっている)。

翌日は前夜のアルコールも抜け、心地よい緊張感の中、いよいよ本大会を迎えるが、ここ数年の傾向として、ほろ酔い状態の練習ラウンドの方がスコアの良い人が多い。二日酔いが影響するのか、あるいは、アルコールが抜けたことによる影響なのか、はたまた、本番の緊張によるものなのか、各自それぞれの理由はあろうが、本番に本来の実力を発揮できないメンバーが多いのが、ここ数年の敗因である。

筆者は、駐在丸3年になるが、実はまだ4ヶ国対抗での団体戦の美酒を味わったことがなく(現在の多くのメンバーが同様だが)、何とか、駐在中に念願を叶えたいと熱望している。

現在のメンバーでの遠征は非常に楽しいものであり、これはこれで継続しつつ、何とか、皆の本番での実力発揮の方法を見い出し、勝ち鬨をあげたいものである。来年こそは、是非、団体優勝奪還を目指しましょう。

(ひらまつ・たつひさ)

スポーツ行事・運動サークル情報

ゴルフ部 2011年活動報告

1.月例会年間結果

	優勝	2位	3位
3月	柿崎(スズキ)	清水(スズキ)	飯尾(大吉)
4月	飯尾(大吉)	畑山(ソニー)	勝川(リョーフ)
5月	金広(ユーラシア)	柿崎(スズキ)	栗原(スタンレー)
6月	坂梨(丸紅)	成沢(伊藤忠)	石橋(住商)
7月	青島(矢崎総業)	川口(日本人学校)	高濱(東洋シート)
8月	川口(日本人学校)	陸川(三井物産)	青島(矢崎総業)
9月	加藤(大林組)	榎平(リョーフ)	町野(スズキ)
10月	坂下(ブリジストン)	畑山(ソニー)	栗原(スタンレー)
11月	町野(スズキ)	小松(個人)	榎平(リョーフ)

◎2011年度プレーヤー・オブザイヤー(年間最優秀選手)決定!
柿崎広好 選手(スズキ):月例会の成績に基づく獲得ポイントの
集計結果

2.「大吉杯」ゴルフマッチプレー選手権歴代記録

	〈優勝〉	〈2位〉	〈3位〉
第1回(2002年春)	福田(住商)	賀来(大豊)	三ヶ島(クラリオン)
第2回(2003年春)	飯尾(大吉)	手嶋(デンソー)	武藤(トヨタ)
第3回(2003年秋)	福田(住商)	飯尾(大吉)	野村夫人
第4回(2004年春)	野村夫人	飯尾(大吉)	武藤(トヨタ)
第5回(2004年秋)	工藤(TDK)	三ヶ島夫人	奥野(スミトランス)
第6回(2005年春)	野村夫人	直江夫人	宮岡(住商)
第7回(2006年春)	島川(関西ペ)	直江夫人	野村夫人
第8回(2007年春)	星野(SEWS)	島川(関西ペ)	江森(ソニー)
第9回(2008年春)	辻(SEWS)	島川(関西ペ)	三宮(大林組)
第10回(2009年春)	飯尾(大吉)	平松(住商)	宮崎(日清食品)
第11回(2009年秋)	岡崎(菱和)	陸川(三井物産)	平松(住商)
第12回(2010年春)	成沢(伊藤忠)	岡崎(菱和)	平松(住商)
第13回(2010年秋)	柿崎(スズキ)	成沢(伊藤忠)	三木(伊藤忠)
第14回(2011年春)	飯尾(大吉)	柿崎(スズキ)	成沢(伊藤忠)
第15回(2011年秋)	川口(日本人学校)	平松(住商)	柿崎(スズキ)

3. 四カ国対抗親善ゴルフ大会(前頁参照)

☆ゴルフ部新入部員歓迎
連絡先:古城 e-mail: manabu.furuki-nnr@dachser.com

テニス部

冬季シーズン開始!

日曜テニスチームは初心者から経験者までが気軽に参加しています。

約30分のウォーミングup後、ダブルスの試合をしています。

場所:マッチポイントテニスコート

(マムートショッピングセンター近く)

<http://www.matchpoint.hu/english/main.html>

時間:9:00~11:00

また、新年会・忘年会等のイベントを開催し、親睦を深めています。

2011年活動:ウィーンテニスチームとの交流戦

代表:的場:h-matoba@exedy.com TEL:+36-30-487-1970

バドミントン部

中学校の体育館の2面を借りて、毎週日曜日に2時間程度の活動をしています。運動不足の素人おじさんに加え女性と子供が数名、合計10名強です。

はじめの30分間は練習、その後ダブルスの試合を行っています。経験者が少ないので、週末の運動不足解消という気持ちで続けています。

ラケットは会場で貸し出し出来ますので、室内シューズを持ってきて頂ければいつでも参加可能です。

参加費は、当面1,000HUF/大人(試合に参加しない子供はタダ)でやっています。

今年の夏は参加者が減り、部の存続が心配でしたが、冬になり参加者が増えて楽しい活動が継続出来ています。興味のある方は是非参加ください。

① 現在の部員数

大人:10名(女性は2名、他に時々参加の方が10名ほど)
子供:4名

② 活動場所と時間帯

日時 毎週日曜日の午後4時から2時間
場所 中学校体育館(ブダベスト2区、Kokeny u. 44.)

③ その他の活動

ウィーン日本人バドミントンクラブとの交流会、飲み会

④ 代表の名前と連絡先

代表 升谷裕司
問合せ先 hujpbad@gmail.com



編集部よりのお知らせ



「ドナウの四季」のHPが完成しました。これまで掲載されたすべての原稿を読むことができます。 <http://www.danube4seasons.com>

皆様の原稿をお待ちしています。エッセイ、ハンガリー履歴書、自己紹介、サークル紹介などの記事をお寄せください。提出いただいた原稿は、紙面統一の編集のために修正することがあります。修正した原稿は執筆者の校正をお願いしています。

原稿は電子ファイルで、morita.magyar@gmail.comへお送りください。Word文書あるいは一太郎文書でお願いします。EXCEL形式での提出はお控えください。写真および図形は別ファイルで送付ください。

インターネットで人生の楽しさを広げましょう! オトナももっと遊ぶ時代

人生に夢と輝きを BYOOL SNS ~The Best Years Of Our Lives~

BYOOL SNS (Social Networking Service)は、大人が楽しめるユーザー参加型のWEBサイトです。スマートな大人が集まるグローバルな知的空間を目指しています。現在、10ヶ国の海外に住む日本人が参加しており、国を超えて、文化や政治・経済始め、幅広い分野において、情報発信、議論を行なっています。あなたの知的好奇心を満たしてみませんか?

★参加方法：事務局まで参加希望の旨、メールをお願いします。招待メールをお送りします。

BYOOL事務局 Email: admin@byool.com 「BYOOL Bloggers」 <http://www.byool.com>

★お問い合わせ：上記事務局アドレスまでお問い合わせください。

日記・エッセイ



自分のページを持てる。
日記、エッセイ、ブログ、
記録として。

コミュニティ



同じ興味・関心を持つ
仲間の交流の場。
OB/OG会にも。

豊かさ・輝き



様々な人の意見・情報のシェア、
そこから生まれる新しい
発見や気づきが、
人生を豊かに輝きあるものに。

安心・安全



無料会員制。
SNSのメンバーだけが利用
できるクローズドなサービス
なので、安心安全。

書き込みはすべて非公開にできますので、スケジュール管理や、何か自分の記録をつけたり、コミュニティをグループの連絡用に使用していらっしゃるメンバーもいます。

BYOOL Selection

BYOOLでは、品質にこだわり抜いた無農薬・有機栽培の緑茶知覧茶・有機緑茶と、コクのある味わいの知覧茶・深むし茶を皆様にご紹介しております。

国内でも有数のお茶の産地として知られる鹿児島県知覧町の、全国茶品評会などのコンクールで、上位入賞経験を持つお茶園から、直接取り寄せました。環境に優しく、そして、人に優しいお茶で、心落ち着かす優雅なひとときをお過ごしください。 **BYOOL Selection:** <http://byool.open365.jp/>

さくら DESIGN

CI、広告、ロゴ、ホームページ等
名刺1枚からご希望の言語にて
デザイン致します。

各種パッケージ、インテリアのデザイン、
内装工事、翻訳から印刷まで
幅広く受け承っております。
お気軽にお問い合わせ下さい。

SAKURA DESIGN: info@innerdesign.hu
Inner Design Group · 1021 Budapest, Bognár utca 7.
Tel/Fax: 1-200 3213 · Mobile: 06 20 480 4431

www.innerdesign.hu

Propart Hungary Bt.

各種コンサート企画・製作・国際交流イベントを
中心とした業務の運営。ハンガリーを拠点にグ
ローバルな企画・マネジメント展開を行って
います。お気軽に、御相談下さい。

- ・音楽企画/マネージメント
- ・若手音楽家の育成サポート
- ・国際交流事業企画運営
- ・留学/音楽研修サポート
- ・短/長期賃貸物件仲介
- ・各種通訳
- ・翻訳サポート
- ・買い/レンタルピアノ仲介
- ・輸入/輸出楽器仲介

ハンガリー国内出張演奏、
各楽器講師紹介なども随時承っております。

Propart Hungary Bt.

Address: 1089 Budapest, Kőrös utca 25. II/6
Tel&Fax: +36-1-786-7846
Mobil: +36-70-3815548
e-mail: propart@chello.hu
web: <http://propart.client.jp/>

Propart